



# 内川漫歩 20



18

小日向 薫

内川漫歩2018

小日向

薫

東京の羽田空港の地先から約1km北方向に位置するところに、内川という名の小河川が流れている。地元では、この河川を新川と呼ぶ人もいる。

大田区中央3丁目から東に向けて流れ、最後は、昭和島運河に流入している。ほとんど、誰にも注目をされない河川である。だが、この川、戦前戦後を通じて、経済、産業、文化の進展に多く関わっているのだ。今では、退職老人のハゼ釣りのメッカとなってしまうが、振り返れば、歴史がいっぱい詰まっているところなのだ。

内川の河川として認識のできる流域距離は、河口までおよそ1.5キロメートル。川幅も10メートルほどしかない。2級河川としては、おそらく国内で流域距離の短さの1、2を争うであろう。その流域をくまなく歩き回り、歴史を振り返りたい。

さて、準備ができれば京急の平和島駅前から、内川漫歩2018に出発する。

京急平和島駅、駅前前史

京急平和島駅の改札口は、昔も今も1か所しかないので、大変に分かり易い。今では、改札口から左にほんの数歩進めば、第一京浜国道に出る。

京急が高架される前の平和島駅舎は、現在の駅に敷設されている京急ストアの入り口付近が、当時の切符売り場。その右側が改札口だった。

改札口は並列に6か所ほど設けられており、切符売り場の後ろが駅務室となっていた。ホームに行くには、改札口の中から階段を上り、線路を横断するように通路を歩く。手前で降りると品川方面行きのホームで、その先の左右に降りるホームが、横須賀、浦賀方面行きであった。

第一京浜国道側に、駅の出入り口がなかったため、国道側からの京急利用者は、線路際まで直進して左に誘導され、歩行者用踏切を渡り駅に向かった。このため、美原通り側の京急利用者は、電車に乗るには大変な手間がかかった。

しかし、平和島駅は、待避線を有する島スタイルの駅であったことから、各駅停車を待たせて、特急電車や急行電車に乗り換えることができた。

加えて、当時は、京急鮫洲駅が待避線構造となっていなかったこともあり、通勤、通学で特急電車に乗り遅れたとしても、後発の各駅停車に乗車さえすれば、品川駅には、次に来る特急電車よりも早く到着できるという恩恵もあった。

その後、途中駅、青物横丁駅に特急が停車するようになった。また、鮫洲駅を特急電車などが通過するための複々線工事があった。快速、特急、急行電車が、鮫洲駅に各駅停車を停車させて、上下線とも同駅を通過する運行スタイルとなった。

京急では、羽田空港利用者の利便のための運行ダイヤが組まれている。このため、平和島駅は、日中の時間帯は、各駅停車だけが停車するローカル駅に格下げされた。

東京オリンピック翌年の昭和40年、京急では、この駅を学校裏駅から平和島駅に駅名変更した。この年、首都高速道路の開通や、東京モノレールの開業など、東京自体が目まぐるしく変化した。

平和島駅の周辺も、1973年（昭和48年）に、京急の高架化工事と、第一京浜国道の拡幅工事が始まって、大きく姿を変えた。京急の沢田通り踏切（環状七号線踏切）は、高度成長期を迎え増え続ける自動車交通量に対応できず、慢性渋滞を引き起こし、開かずの踏切と呼ばれた。渋滞解消のために、京急の高架化工事が始まった。同時に、並走する第一京浜国道の拡幅工事も着手された。川崎方向から、品川に向かう第一京浜国道の登り車線側が、幅20メートルほど拡張された。これに合わせて、交差する第一京浜国道と、環状七号大森東交差点の立体化工事が始まった。

京急の高架化工事は、上り線路造りと下り線路造りを別々に行い、タイムラグを持って架け替えた。同工事により、平和島駅と環状七号線の間には設けられていた、主に人が平和島駅を利用するために設けられた踏切が撤去された。この駅前踏切の撤去工事に伴い、同じ踏切下に人専用の地下横断通路が新たに設けられた。

美原通り方面から、京急平和島駅に向かうには、今では想像もできないが、マルセ酒店前の信号から、第一京浜国道を渡りそのまま線路へと進んだ。線路際までの距離は、国道を渡り切ってから、だいたい20mほどの距離であっただろうか。

その道が存在したのは、今のJR大森駅行きの平和島駅バス停留所の辺りであろうか。道の両側には、小規模の飲食店街が形成されていた。直進して線路際までくると、今度は、線路に沿って左に誘導された。ほどなく歩行者用踏切が設けられており、駅舎側に横断できた。（大森第一小学校HPの中、田中實氏の平和島駅の写真参照）

踏切を渡りきると、正面は、現在の喫茶「ハト」（60年以上の営業、大田市場内でも営業）のあたりであった。この踏切が京急高架化工事の一環で、撤去された。臨時に、線路をくぐる形で仮設の地下横断通路が作られた。

現在、平和島駅改札口の左前に立ち食いうどん店がある。この店の奥に公衆トイレがあり、地下横断通路はこのあたりに設置されていた。

地下横断通路は、待避線を含み四路線をまたぐもので、それなりの長さがあり、いつ通っても照明が暗くて、湿気の多い地下横断通路であったと記憶している。

第一京浜国道の拡幅工事により、平和島駅に面した側の登り車線が品川に向かって幅20mほどセットバックさせられた。

その結果、現在のJR大森駅行バス乗り場付近に設けられていた、第一京浜国道から平和島駅に向かうための飲み屋小路は、立ち退いて消滅した。

飲み屋小路の両側には、ホルモン焼き店、小料理店、スマートボール（遊技場）などの小店があって、夜ごと、日本特殊鋼会社、東京瓦斯大森工場会社の社員らで賑わった。

平和島駅から内川河口へと向かう

京急平和島駅改札口の左前方にあるのが、東京富士信用組合という信組だ。1965年に創業した。戦前、戦後の工業の発展に伴い、鍍金や金属加工業会社などが、東京湾へ工場排水を流した。

このため、海苔養殖場近辺の水質が悪化し、良質な海苔の生産ができなくなった。この結果、大田区内の漁師は、海苔採取の漁業権を放棄した。その補償金を元手に、大森の海苔業者たちが集まって設立した金融機関だ。

#### 鰻の秋葉、マルセ酒店、大和銀行大森支店

平和島駅前の信号を渡ると、正面が昭和4年9月操業の鰻の秋葉。持ち帰り、店内でも10席ほどのカウンターがあり、ここで飲食ができる。最近では、鰻短冊、頭、ヒレ以外の野菜串や、ウインナーなどの串焼きも置いていて、1串がほとんど180円からの販売となっている。

酒類は、コップ酒1合220円からの販売で、リーズナブルなお勘定でほほを染める方も見受けられる。近くにある平和島競艇場の全盛期は、最終レースが終わり5分もすれば、満席となる超人気店。かつて、この店のファンは、競艇場から美原通りを走って、席を争った。

その隣が、マルセという酒店である。店倉庫の左側が美原通りに抜ける小路。この小路の中ほど左側奥に芝居小屋があった。マルセ酒店の客用駐車場が見える。その先の14階建ての大森本町ハイツ（大森本町2-5-17）が、もとの大和銀行大森支店（現りそな銀行）があった場所。

大手金融機関が存在したのが、このあたり一帯が大森の中心地であった証拠。この大和銀行の建物は、その昔、千代田区の内幸町などに見られた当時のモダンな洋風建築仕様で、とてもしゃれた建築物だった。その後、りそな銀行は大森西2丁目の環状七号線の横断歩道橋先の左（現在、ガーデンホーム大森）に大森西支店として営業を開始した。やがて、大森ミルパアーケード内にある、りそな銀行大森支店に統合された。

#### 大森東交差点から環七大井ふ頭方向へ

自動車の進行方向に沿って、第一京浜国道を川崎方向へ向かう。すぐに、環状七号線と交差する大森東交差点に出る。コンビニのある交差点だ。目の前にガソリンスタンドが見える。

交差点では、まず右側を注目してほしい。第一京浜国道が、立体交差の上部を通過して、環状七号線側がその下を走行する。

この交差点の特徴は、歩行者用の横断歩道が、3ヶ所しか設置されていないことだ。本来、十字路の構造の交差点では、横断歩道が4ヶ所設けられなくてはならないところが、この交差点では、3ヶ所しか設置されていないのだ。

この先のガソリンスタンド側に渡ってしまうと、第一京浜国道を横断するための横断歩道と歩行者用信号機が設置されていないのだ。

このため、このガソリンスタンド側から道の反対側に行きたい場合は、もと来た横断歩道に戻るより方法はないのだ。歩行者用信号が青になるのを待って、横断歩道をコの字に3回も渡らざるを得ないのだ。歩行者にとって大変に不便な環境となっている。

半面、ここを通過する車両には、とても便利な設定となっている。環七大井埠頭方面から来た車両には、左折可の信号点灯時間を長くして、スムーズに川崎、横浜方面へと流す工夫がされているからだ。

信号待ちの時間を利用して左側、大井埠頭方向を向いて、環状七号線の道路の構造を見てほしい。そこからは、道路が左にドグレッグしていることが確認できるはずだ。

ガソリンスタンド側に渡り、左に歩いていく。海苔とお茶販売の「松尾」商店がある。その前方に、牛丼のすき屋が見えた。

牛丼屋脇に見える小道右にあるセブンイレブンは、元の東京産業信用金庫大森支店（当時の名称は東京府水産信用購買販売生産組合）があった場所。

そのまま、大井埠頭の方向へと進む。道路沿いに中古車展示場があり、右には又、小路が見える。そのまま、二郎系ラーメン店を越え、薩摩っ子ラーメンも通り過ぎる。

倉庫のような建物の五味商店という海苔の卸問屋まで来たら、振り返って、平和島駅の方向を見てほしい。先ほど、右側に見えていたそれぞれの小道が向かい側の環状七号線越しに同じ道路としてつながっていたことが確認できる。

そう、環状七号線大井埠頭までの延伸工事のため、そこに住む住民たちは立ち退きを余儀なくされた。環七通りとの接続のために、この地の居住者の土地が、バッサリと削り取られた痕跡なのだ。

船溜まりを埋め立て、道路になった

海苔卸の五味商店の角を右に曲がっていく。左側は、公園になっている。そのすべてが、日本特殊鋼会社を創業するために埋め立てた広大な工場跡地だ。

このあたりの環状七号線の部分は、海だった。横断歩道橋下の美原観音菩薩という稲荷神社があるが、元は、環状七号道路の向かい側の大森都新地側にあった。これが、新規に作る環状七号線の計画線上に当たったため、移転遷社されたという。

今歩いている道路は、昔ワンドになっていて小舟の船溜まりの場所であった。行く手50mほどの右側に大森海幸食品という佃煮屋さんがある。好みの佃煮を、一人前の少量販売でもしてくれるので便利だ。

この店のご主人によると、昔は、取ってきたアサリを剥いて、不要な貝殻を店の前に撒いていたとか。地元民は、このあたりから、東京ガス大森工場のガスタンクのあったあたりまでのことを「山」と呼んだ。

バカ貝やアサリを採ってきて、これを剥き身にして販売する。これを生業としていた漁師が多かった地域だ。剥き終わった貝殻を、そこいら中に捨てたので、それらの貝殻が積もりに積もって山のようになった。このため、いつしか当地のことが「山」と呼ばれるようになった。

旧、日本特殊鋼跡地

しばらく歩くとT字路にぶつかる。正面が、大田区立大森東小学校。昭和57年4月の開校。日本特殊鋼会社の跡地に建てられた。突き当りを左に曲がる。左側に老人施設や、大田区立大森東図書館などがある。すぐに小学校の正門前に信号があるのが見て取れる。その先や右側は都営や、区営のアパートメント群になっている。

信号を道なりに左方向に進む。直角の公園を見ながら進む。その先に、コインパーキング見えたら、右に曲がる。前方、頭上に平和の森公園の案内板が見える。都立美原高校の校庭を左に見て進む。やがて、公園入口が見えてくる。

右手に見えるのが、東京都の下水道局大森東ポンプ所（1992年5月開所）という施設である。ここ

では、大田区の大森、中央、馬込、池上地区の雨水と汚水をくみ上げて、水の分別を行っている。雨水は、京浜運河に放水して、汚水は、森ヶ崎にある水再生センターに送水されて、ここで洗浄される。

平和の森公園内に入ると右前方に見えるのが「大森海苔のふるさと館」という施設。海苔の歴史や海苔の生産方法など、海苔に関することがいろいろと学べる施設となっている。

#### 内川河口の始まり

右側の芝生の中に、長い青色の滑り台が見える。その先が、内川の河口の始まりの場所だ。内川河口には、コンクリートが打たれた船着き場があって、そこに、船舶が何艘か係留されているの見える。

小さなヨットハーバーのような佇まい。大田区の水面管理防災施設の名称で、大型のクレーンが設置されていて、船舶の補修が可能な施設となっている。災害などが起こった緊急時には、ここから船舶を出動させて、救急物資を搬送する基地にもなる。

このコンクリート施設の中に「まる八」という遊漁船の船宿がある。東京湾内専門の釣魚船宿で、時期にあった魚種を求めて出漁してくれる。夏場などは、比較的簡単なシロギスなどを釣らせてくれ、子どもでも、飽きることなく1日を遊ぶことができる。

「まる八」が元あったのは、第一京浜国道の平和島入り口、T字路を曲がったところのローソンのその先だ。

平和島に渡るために架かっていた赤い橋のたもとだった。平和島は、当地が都市計画の一環として埋め立てられる前は、本当に小さな島だった。当時の平和島に行くのには、古くは2本の橋が並列に設けられていて、このどちらかを利用して平和島に渡った。

木造の橋は、主に人の通行用として用いられた。次に併設されたコンクリート製の赤い橋が、主に車両の通行に用いられた。赤い橋の袂の左手に、「まる八」。木の橋を渡った先のたもとには、「みすず」という船宿があった。

現在の京急バス車庫（大森営業所、平和島4丁目）のあたりに、「中の島」と呼ばれた、引き潮の時だけ出現する砂洲があった。潮流の影響で砂洲が堆積した場所とされている。ここに、まる八やみすずから渡船が出て、夏場は、ハゼ釣りのメッカとなっていた。

今のビックファン平和島施設ビルの前にある野球場のグラウンドは海だった。側道道路沿いのフェンスに沿った植込みのあるところが、今の平和島ユースセンターのところまで岸壁となっていて、これが海との境であった。

高速道路羽田線や、その先の東京トラックターミナルも、当然、海の上であった。このあたりにあった岸壁では、夕まずめの上げ潮に向かって老人たちが釣りをしていた。

彼らは、長尺竿に赤短冊のイカリ針のひっかけ仕掛けで、ボラの大物釣りをしていた。そのシーンは、今でもはっきりと覚えている。

#### 美原通り、縁日。大森の1丁目1番地

内川を語るうえで、日本特殊鋼会社と東京ガス大森工場は外せない。両社は、内川の河口の左右に明治、大正、昭和と元祖大森のランドマークとして対峙したからだ。このため、地域は美原

通り商店街を中心に発展していった。

美原通りでは、毎月6の日に縁日が行われ、夜の8時くらいまでは、通りの左右に露店が出店して、賑わった。縁日の日の美原通りは、北は大森魚市場から、南は、内川にかかる内川橋の際まで露店が出て、人でごった返し活力があった。

記憶のあるものとしては、バナナのたたき売りや子供をターゲットとしておもちゃ売り。なかでも、小さなセルロイドでできた小舟を売る商売が少年の心をとらえた。

樟脳を推進力としたセルロイドで出来た2cmほどのカラフルな小さな船を金盞に浮かべ、このセルロイド船を売る商売。

船の尻に樟脳をつけ、水に樟脳が溶けることを推進力とした不思議を実験のように見せてセルロイドの船を売る。定番のひよこ売りや綿あめ菓子売りなど、子供に魅力的な屋台が所狭しで続いた。

縁日は、環七大井ふ頭部分から第一京浜国道までの開通により、美原通り商店街が南北に分断されるまで繁盛した。

また、古い話になるが、日本特殊鋼会社、東京ガス大森工場会社は、戦時中は、空襲の被害をあまり受けなかった。

第二次世界大戦では、19回に及ぶ東京空襲があり、いたるところが焼け野原と化した。だが、この地を襲う空襲では、米攻撃機B29は、その少し北に位置した平和島に設けられた米兵を主とした捕虜収容所の誤爆を避けるために、両工場を目印に置いたという。

この地の少し南や、西に位置する森ヶ崎、大森山谷地区（現京急大森町駅近辺）や、蒲田地区の空襲被害の大きさを考えたとき、両工場の被害は少なかったとされている。

今でこそ、大森というとJR大森駅近辺を想像される向きも多いと思われるが、「大森」という地名の1丁目1番地はこの日本特殊鋼会社の辺り一体を指すのだ。

荏原郡大森村は、古くから、東海道の品川宿と川崎宿の間（中町）の地点として旅人の休息所として栄えた。多摩川、呑川、内川などの河川から東京湾に流れ込んだ栄養豊富な水が、豊かな魚介類を育て、漁業を振興させた。

特産品の海苔は、今をはるか1684～1688年にはすでに採取、製造されていたという記録がある。

一方、農業も盛んで、その二次生産加工品の麦わらを使用した麦わら帽子の製造なども1877年（明治10年）内国勸業博覧会に出品して好評を博し、花形の輸出品となった。

1914年（大正8年）に第一次世界大戦が開戦。世の中は、工業化と、軍事産業の強化がなされていく。やがて、昭和の時代に入り、1931年（昭和6年）になると、これまでの手工業製品の需要は衰退していく。

京浜地区の工業化は、その一環として、1927年（昭和2年）東京一横浜間で工業用の埋め立地の建設が始まる。大型船が接岸できる埋め立て地の建設で、併せて大型船の運航が可能な運河の深化掘削建設工事も同時に進行した。

一方、大森地区の工業化は、他の東京府市と比べて遅れていた。はじめに、都心に近い港、品川地区が工業化された。その後、工業化の波は、品川地区の隣接地であった地の利から、大森地

区は、その下請け的な役割を担い、工業化が進んでいった。

これには、1916年から1934年に今でいう区画整理に似た、耕地整理組合という土地改良の組織が作られ、農地が宅地や工業用用地に造成されていった。

曲がりくねった道のマス目状の整理や、凹凸のある地形を当該地権者（地主）の利害調整で平坦化事業を行った。これにより、この地に他地区からの工場の移転や、新規の工場進出が容易となり、大森地区の工場化、工業化が一気に加速していった。

日本特殊鋼会社、創業者、渡辺三郎氏

この地に、日本特殊鋼会社の創業者、渡辺三郎氏が目を付けた。渡辺氏は、東京大学採鉱冶金学科を卒業後、古河鋳業所に入社。

その後、ドイツ、アーヘン工科大学に留学、欧州の進歩した製鉄学を学んだ。大正4年、1915年11月に日本特殊鋼合資会社を設立した。1880年12月2日生まれの氏は、日本の鋼の父と呼ばれ、特殊鋼の命名者でもある。

群馬県松井田の生まれ。大河原新七、野恵夫妻の3男として誕生。長じて、同県の大資産家、銀行家の渡辺福三郎、多満子の5女、那べと入夫縁組、渡辺姓に改正した。こうした背景に支えられたこともあって、渡辺は、荏原郡大森村に日本特殊鋼会社を創業することとなった。

大森の創業地は、海岸部分を丸ごと埋め立て地として造成。漁民との漁業補償交渉や、海岸の埋め立て造成費用の捻出も、銀行家であった義父ならびに渡辺家親族の資金援助に支えられた。加えて、大河原家からも資金や人的援助などがあって企業にこぎつけた。渡辺、1916年4月の35歳の時に日本特殊鋼会社の操業となった。

時代的背景から、軍需産業的の色合いが濃かった。銃器、火器の製造にも携わった。また、後年はトラクターや、ブルドーザーなどの建設機械の製造もおこなった。第一次大戦や第二次大戦、朝鮮戦争特需などの景気にも支えられたが、高級鋼分野では、日立金属との価格競争に敗れた。

構造不況産業となり、昭和26年、渡辺氏、死去。その後、再建の神様、早川種三氏の手腕で会社は一時立ち直るが、業界再編の波に乗り遅れ、昭和51年9月、特殊製鋼会社とともに大同特殊鋼会社に吸収合併された。

技術者らは、群馬県の渋川市の大同製鋼所に移転した。特殊鋼会社は、不思議な縁で渡辺氏の生まれ故郷に戻った。

東京ガス大森工場（ガスタンク）

東京瓦斯大森製造所は、当地に1908年明治41年に建設許可を受け、翌年完成した。この年は、大森海水浴場が開設された年でもある。

ガスは当初、熱源よりも、闇夜を照らすガス灯として横浜（中区、馬車道）で誕生した。明治32年、それが、熱源として使用する竈など瓦斯調理器具製造工場ができ、普及が始まった。これと同時に、国策で、それまでの地域のガス会社が合併により東京市を束ねる規模のガス会社となっていった。市内では、明治45年に千代田ガスと合併。神奈川では、昭和19年に鶴見ガスと

、昭和20年には横浜市ガス局と合併。その後の続々と地域のガス会社が合併して、ガス供給のパイプライン網が完成をしていく。

当時のガスの製造方法は、石炭を燻蒸してガス化。生成分離して、ガスタンクに貯蔵した。この製造過程で発生する硫黄やアンモニアは、化学原料として販売。固形のコークスは、セメント会社や、製鉄所などの炉用熱源に販売した。

昭和30年以降は、重油を熱分解するダイレクト方法に替わった。昭和40年以降は、天然ガス（LNG）に移行。気体をマイナス162度で圧縮して液化する。液化圧縮なので、一度にタンカーで大量の搬送が可能となった。これを使用する前にもう一度ガスに転化させてガス管に供給、事業所や各家庭で使用する。

東京ガスは、戦後、現在何かと話題の豊洲（2018年10月、豊洲市場開設）に石炭工場を稼働させた。大森工場も昭和60年代まで稼働していたが、昭和62年に閉鎖した。

### 浅野財閥

浅野財閥を築いた浅野総一郎氏は、明治6年には、横浜市のガス局に石炭やまき炭の納入業者として出入りしていた。横浜市ガス局川崎工場（現在の川崎競馬場？）で、石炭を燻蒸してガス製造の際に発生する廃棄物のコークスに目をつけた。

処分に困っていた横浜市ガス局から、これを安く仕入れ、セメント工場に原料として販売していた。やがて、自身でも浅野セメント会社、コークス運搬のための東洋汽船を設立。さらに、資材を運搬するために運搬船発着のための川崎埠頭まで作り、川崎市東部の臨海部の発展に大きく寄与した。

### アサヒビール大森工場

東京瓦斯工業という東京ガス関連会社は、1910年、明治43年東京、本所に誕生した。ガス器具製造を目的とした会社だが、1913年には、電気器具製品の製造もするため、東京瓦斯電気工業と社名変更する。

1917年、東京瓦斯電気工業、本所業平の工場は、手狭になり大田区入新井町に大森工場として移転した。同地はその後、アサヒビール大森工場となった。また、アサヒビール移転後の跡地は、現在、イトーヨーカ堂大森店、第一製砥（ディスコ本社）、大規模集合住宅の大森プロストシティレジデンスとして分割して使用されている。

### 京急大森海岸駅ーJR大森駅間に路面電車

JR大森駅（大森停車場前駅）と、京浜急行大森海岸駅（八幡駅）の間を路面電車が走行していた、とすると驚く人がいるかもしれない。

正確には、1901年2月1日には、六郷橋駅（神奈川県、川崎区の大師線港町駅の手前にあった）から、大森停車場駅までが開通していた。

だが、京浜急行が品川駅（現在の北品川駅）まで延伸する（1904年5月8日）と、大森停車場駅行きは本線と切り離され八幡駅（大森海岸）ー大森停車場駅（大森駅）間の支線運行となった。やがて、1937年に廃止された。

今のイトーヨーカ堂（大田区大森北2丁目）西北側（NTT大森ビル、ツタヤ前）ヨーカ堂自転車置き場のところに路面電車が運行していたという碑が残っている。

アサヒビール大森工場のあった場所で、現在では、イトーヨーカ堂大森店、ディスコ本社（呉市発祥、第一製砥所）のあるところである。

この地に、1918年、東京瓦斯電気工業大森工場が完成し、有能な技術者が集合した。この結果、会社そのものは構造不況により大正時代に無くなったが、優秀な遺伝子は受け継がれた。航空機、列車、自動車、建設機械、マザーマシン開発などの各方面に枝分かれし今日の基幹を作った。戦前、戦中、戦後を通じて、日本の工業化の中心を担う幾多の企業が生まれ、発展成長していった。

## 内川河口から

まず初めに、内川に架かる橋は、河口から順に、浜辺橋、新橋、内川橋（旧東海道、美原通り）、大森橋（第一京浜国道にかかる）。

一之橋、京急内川架橋、二之橋、諏訪橋、四之橋、五之橋、富士見橋、境橋、三ツ木橋、新田橋、JR東海道架橋となっている。

これに、内川水門に設けられた水門メンテナンス作業用の橋も入れると、たった1.5キロメートルの流れの割には、橋が異常に多い。橋の多さは、この地が耕地整理により、網の目状に整地されたことによるものか。

## 浜辺橋—東京ガス旧工場を一巡

浜辺橋は、新設の大森ふるさとの浜辺公園に向かう橋として、平成18年12月6日竣工と大田区の広報課で教えられた。平和の森公園と、公園南東部に設けられた人工の浜辺、ビーチバレーコートなどの運動場へ行き来ができる橋だ。

東京ガスの工場跡地は外周部を一周することができる。浜辺橋から、公園の緑道を南に砂浜を左に見ながら歩けば、貴船堀という水門付きの船着き場まで行ける。この堀には、ワイヤーロープで、漁船を巻き上げる装置が敷設されていたのだが、堀自体が埋め立て対象にされていて、すでに撤去されているかも知れない。

ワンドの終点を右に曲がると、左側が、貴船堀緑道となっている。元は、地元民の生活用水に使用された六郷用水が貴船堀に流れ込んだ。右手に、東京ガスのグラウンドを見ながら歩いていくと、やがて、工場内に設けられた稲荷神社が現れ、正門にたどり着く。

そのまま、ゴルフ練習場を過ぎると右に曲がれるので、内川まで進む。突き当りにあるのが、内川排水機場という施設。川沿いを下流方向へと進む。サッカーグラウンドがあり、ビーチバレーコートがあって元の浜辺橋に戻ることができた。

## 内川水門の作業橋

内川水門に作業用の橋があるのだが、古地図を見てもそのあたりに、橋が架かっている。それが、日本特殊鋼会社の出島に行くための橋であった。

出島があったのは、浜辺橋を渡り、川沿いに設けられた観客席付きの本格的なビーチバレーコート、3面あるビーチバレーの練習場もその範囲になる。

その先にも、フットサルグラウンドが造られており、ビーチバレーコートとともに、大田区の予算で、2017年に完成した。

これに、もともとあった川沿いのサッカーグラウンドの区域が、元の日本特殊鋼会社が出島として使用していた大まかな範囲。長い年月をかけて、内川の砂洲が堆積してできた島なのかもしれない。

日本特殊鋼会社でもやはり、内川水門あたりに橋を設けて製品置き場や資材置き場などとして使用していたようだ。

2001年、この三角出島に本格的大規模な埋め立て拡張工事が始まった。三角出島の先の東南部分を大規模に埋め立て、東京ガス大森工場跡地の敷地と繋げたのだ。

ここに芝生の広がる遊歩道を作り、浜辺には大量の白砂を入れ、サンドビーチを造成した。南方向の貴船堀水門に向かっても、海岸線を大きく埋め立てた。

元東京ガス会社の敷地の東側一体に2007年4月1日、広大な大森ふるさとの浜辺公園が完成した。この時、日本特殊鋼会社の三角出島も浜辺公園の一部に取り込まれた。

## 浜辺橋をスタート

内川の上流に向かい、右岸を遡る。ここでは、浜辺橋より車道上を歩いてほしい。公園出入口の生け垣が右側に見える。この部分は、東京都下水道局大森東ポンプ所の敷地になる。

前に団地があるので、右に曲がり、生垣沿いに北に進む。もと来た道の都立三原高校のグラウンドに突き当たる。左に曲がり、その先、突き当りを右に曲がる。

三原高校の正門を過ぎて、信号まで来ると環状七号線だ。この右手が、大森消防署となる。日本特殊鋼会社の跡地の中だ。

環七、大森消防署（大田区大森北の環七春日橋際より移転。昭和62年8月1日稼働＝東京消防庁間い合わせ）まで行ければ、消防署とその先の公園の境目に、「みやこおおはし」と書かれた銘板があるのが確認できる。

その下を覗くと、かつての防波堤を形成した石垣が多数、目視出来る。これが、日本特殊鋼会社の東側角の岸壁だった。

岸壁痕は、消防署の前の信号を渡り、右に進んでいって、平和の森公園の境界を見てもいたるところにその痕跡は確認できる。

こちら側（大森本町2丁目）の岸壁痕は、大正14年（1925）に埋め立て造成された花街の大森都新地の岸壁痕となる。この岸壁痕は、消防署前の信号を渡り、そのまま進んで突き当りに見える大規模施設、大森老人ホームの手前まで平和の森公園との境界沿いに続いている。

この老人ホームは、ワンドを埋め立てたもの。美原通り沿いの川島海苔店の前までがワンドになっていた。その先にある大森スポーツセンターが、元の大森の魚市場となる。

このワンドには、魚市場関係の魚類搬送船のほか、貸しボートが係留されていた。夏の夕涼み時には、花火見物や涼を求めるボート客でにぎわった。

大森都新地の埋め立て造成の範囲は、環七を渡って今歩いてきた部分となる。突き当たった大森老人ホームを美原通り方向へ歩くと、小さな駐車場があり、その中にも岸壁の残骸が見える。その先に中華ミナトという店がある。この手前に緑道があるので、まっすぐに環七まで歩いて行った左側の平和の森公園までが「大森都新地」の埋め立て地の範囲となる。中華ミナトは、姉妹で経営されている店で、営業時間は、午前10時から午後4時まで。ソース焼きそばが、昔ながらの味。

### 江東治水事務所が内川水門を管理

内川に戻って、遊歩道から見えるのが内川水門だ。対岸の水門は、内川排水機場という名称がついている。内川上流から流れてきたごみ類を内川水門の内側から排水機場に取り込み、ろ過した水を定期的に、ここから海側に放水している。

内川水門の管轄は、東京都建設局であるが、江東治水事務所という名称の部署が水門の開放や管理を行っている。

水門は、昭和44年に竣工した。直近では、平成27年に内川水門に対する高潮対策と、耐震化工事が実施された。

水門の門扉も更新された、とある。江東治水事務所・水門管理課のHPを見れば、内川の水門開閉日時が掲載されているの。興味がある方は、HPを閲覧して内川水門の開閉の様子を見るのもよいのではないだろうか。

### 50センチの鱸が釣れる

この水門出口付近が内川の中で最も水深がある部分である。常連の釣り人に聞くと、水深およそ5~6メートル。水門設置と流量の関係からだろうが、水門開放時の放水の力により底部はかなり掘削されているらしい。そのため、数は少ないが、大型のハゼや、50センチクラスの鱸の集まっているところでもある。

### 東京ガス大森工場、勧請稲荷神社

対岸に背の高い大きなフェンスが見えるが、その先にかつて東京ガス大森工場のガスタンクがあった。今は、東京ガスの総合運動グラウンドになっており、野球、サッカー、ラグビー、弓道などの試合や、練習風景などを見学することもできる。敷地内には、別会社のゴルフ練習場も併設されている。

東京ガス大森工場（現、東京ガス総合運動グラウンド）入口の右手に、外のフェンス越しからでも見えるが、勧生稲荷神社という東京ガスの商売繁盛を祈願した神様が祭られている。

その境内には、東京ガス大森工場操業停止記念碑が設置されている。そのモニュメントは、先端がガスの炎になっている。手水舎の側面にも漫画チックなピンク色の炎マークが彫刻されていて、かわいらしい。

東京ガスの広報課によると、工場撤去の際に、いくつかの機械遺産が残置された。神社境内にも、おそらく、ガス製造の際のパイプラインの一部と思われるものが3基ほど放置されている。そ

れらは、今では、周りの景色にすっかりとなじんでいる。聞けば、撤去処分費用が高額なため、放置しているのだと、こっそり教えてくれた。

### 内川水門から海難供養塔へ

水門の右手は、昭和57年開校の大森東小学校である。およそ4000坪の広さの小学校で、都内ではかなりの大きさの学校だ。この年、広大な日本特殊鋼会社の跡地には、この小学校のほか、大森東中学校、大森東保育園、大森東図書館、大森東地域センター、団地1、2、3、6号館が次々に完成。これにより、住、学環境が整い転入人口が爆発的に増えた。

水門を超え、小学校校庭の角を右に曲がると、じき、左側に「海難供養塔」という石塔が建立されている三原講舎という施設がある。

供養塔は、高さ2メートル30センチほどの石塔で、大田区の文化財に指定されている。史跡によると「この石塔は、大森の海岸に流れ着いた死者を供養するために建立された。海難供養塔としては、東京湾岸屈指の規模をもつものであり、また埋め立てによって周辺環境が変わったが、この場所がかつては海岸縁であったことを物語る存在としても貴重である。台座には、江戸や神奈川の魚介業者をはじめ、一般の江戸町民や武士など約三百人に及ぶ名が刻まれている。この塔が地元の人ばかりでなく広い地域のいろいろな階層の人々の協力寄進によって、安政二年（1855）に再建されたことがわかる。昭和五十年三月十九日指定。大田区教育委員会」と、ある。

日本特殊鋼会社が埋め立て造成される前には、この道沿いが、東京湾内海の波打ち際だったのだろう。

その先の信号のある小さな四つ角まで来ると、正面は公園になっている。右に曲がると、そこは、かつて相生橋という名称の「日本特殊鋼会社という人口島」に至る通用橋であった。で、この道が日本特殊鋼会社に行き来するメインストリートだった。

### 内川新橋

川沿いに設けられた、レンガ造りの少し低い遊歩道を歩くとすぐに、新橋という名の橋が現れる。橋を渡り道なりに進むと、正面が元東京ガス大森工場（東京ガス大森ランド）の正面入り口となる。右側に、先ほどの勧請稻荷神社が見える。

手前、ゴルフ練習場を左に曲がると、突き当たり右が、内川排水機場という施設。丁度、内川水門の反対側に出た格好だ。ここでは、水門内側から取水の様子を見ることができる。内川新橋に戻る際に注目してもらいたいのは、近隣道路と比較してのこの通りの道幅の広さだ。これは、この道が東京ガス大森工場に向かうために作られた道路であることがわかる。過去には、この道をボンネットタイプのトラックがコークスを積んで、忙しく走っていたのだろう。

### 佃煮、山権。この地が「山」と呼ばれた

内川新橋に戻る手前の右側に、マンション群があって、その中に、ひときわ高層のスカイコートという名称の大きな建物がある。

ここに、かつて大森で有名な「山権」という屋号のつくだ煮の製造会社があった。銀座や築地の

老舗有名つくだ煮販売店に卸しを行っていたところである。

自社にて高速運搬船を所有して、木更津から良質な魚介類を仕入れていた。しかし、東京湾の水質の悪化などにより、漁獲量が減少した。この結果、つくだ煮生産量も減少となり製造を閉じたと聞いている。

### 美原通り（内川橋）

内川新橋から内川橋までは、ほんの数十メートルの距離。この内川橋を南北に貫いているのが美原通り。内川橋のふもとに、たこ焼き屋さんがありその横の細い道が、「駿河屋通り」といって、羽田の地に向かう旧道（羽田街道）であった。

美原通りをそのまま、蒲田方向に進む。100メートルほどの左に「誠和寮」という建物があるが、これが元の大森警察署のあったところ。今の大森警察署は、元の大森区役所であった。清和寮を挟んだ美原通りの右側の三角地帯の地域は、現在の地域表示では、大田区大森東となっているが、元は、大田区大森三丁目に区分されていた。後の話でも出てくるが、いまでもここは大森諏訪神社の氏子地域である。

### 大森橋

内川橋に戻って、上流へ進む。すぐに、第一京浜国道に架設された大森橋がある。左にペット霊園ビルのあるところである。道幅が広くとられているので、新春箱根駅伝では、反対側の上り道路で復路の選手に、新聞社の小旗を持った人々が大きな声援を送る。

### 1個5円のかき氷

大森橋から車の流れとは反対方向に、京急平和島駅方向に向かう。ここだけ、第一京浜国道により、内川沿いの歩行が遮断されている。なので、取り敢えず、信号のあるところまで戻って、第一京浜国道を横断することになる。

すぐに、大森橋と書かれたT字路の信号のある横断歩道がある。角は、ゲオというレンタルビデオ店。右に向かっていくと、美原通りを超えて、先ほどの日本特殊鋼の正門に向かう通りである。

三軒ほど先の右に「綿庄」という、氷屋さんを併設した食堂がある。この店、元は、京急の環七踏切（沢田通り）と、第一京浜国道の角近くにあったが、道路の拡張工事で立ち退きに会い当地に移転した。

80年近く営業をされている商店だ。子供のころは、夏場になると、氷饅頭というものを販売していた。かき氷を湯飲み茶碗に受け、押しつぶす。これにメロンやイチゴのシロップをかけてもらう。これが、1個5円で販売してくれた。2種類のシロップを掛けてもらうと10円取られた。当時は、持ち帰りに便利なプラスチック容器などがなかったので、アルマイト鍋を持って買いに行った。

「学校裏駅」どこから見たら学校の裏にあたるのか

レンタルビデオ・ゲオ前で信号待ちをして、第一京浜国道を横断する。道路の上に環七を通過させるため4車線のバイパスが走る構造なので道幅が広い。この部分は、上下の車線の合計で八車線分の道幅がある。

こちら側の道路の形状は全く変更されていない。横断歩道から見た先、五車線分くらいが旧第一京浜国道の道路幅であったのだろうか。上り方向の道路沿いの居住者が立ち退き、三車線分ほどの幅で道路は拡張された。八車線道路と、道幅が広いので高齢者や身体の不自由な人にとっての横断は一苦勞だ。歩行者用の青信号の点灯時間が短いのだ。

途中に一息入れる大きな島があるので、次の信号まで島で待てばよいのだが待つ身はしんどい。もう少し歩行者の側に立った優しい交通システムの実現をお願いしたい。ここは、頑張り屋の奈須りえ大田区議に良い知恵を出してもらおう。

信号を渡った正面は、工業用ゴム製品製造の富国ゴム工業（フコク物産）という会社の本社ビル。平和島駅方面へ。すぐに、建築会社のビルを斜め左に向かう細い道があるので、そちらの方向へと進む。50メートルほどで、京急の高架がある。高架下は通り抜けが出来る構造となっている。高架下が、元の踏切跡だ。

この高架下の左寄りの部分が、かつての京浜電気鉄道の「学校裏駅」（現在の京急平和島駅）が所在したところと推察する。どこの「学校裏」なのかというと、その学校名は、大田区立大森第二小学校（現、開桜小学校）であったのだ。

京浜電気鉄道が、この駅を学校裏駅とした駅名の由来は、日本国有鉄道（JR）の大森駅が明治9年6月12日に開業したことに起因する。

大森駅（当時の駅舎は、東口も高台であった）の方角から、明治8年3月30日に開校した寄木小学校（のちの大森第二小学校）の先に澤田駅（学校裏駅のその前の駅名）が見えた。寄木小学校のその先に後から開業した京浜電気鉄道の駅が見えることから、学校の裏に見える駅となり、「学校裏駅」と命名された。

京浜電気鉄道は、国鉄に遅れ、明治34年2月1日に当所部分を開業しているので「学校の裏の方にある駅＝学校裏駅」と名付けられたとする説がある、は頷ける。

ちなみに、国鉄蒲田駅は、明治37年、国鉄大井町駅は大正3年に開業している。この近辺で大森駅の開業が早かったのは、この地に線路の保守点検のための詰所があったこと。鉄道敷設の技術を教えるために、外国人指導者が近くに住み着いたこと。

山王側が高台になっていて、風光明媚であること。別荘地人気で外国人や文化人、政治家などが移り住んだ。こうしたことが重なり、この地に「鉄道駅」の開業を希望する声が高まったとされている。列車で横浜から品川に向かっていったエドワード・S・モースが大森貝塚を見つけたのも必然だった。

来た道を引き返す。フコクビルを通り越してしばらく南に行くと、内川の大森橋上流側のたもとに着く。大森橋上の中央部あたりから上流を眺めると、目の良い人なら富士見橋を左右に走行する自動車が見えるかもしれない。

昭和37年5月10日以前は、内川の両側の住居表示は、大田区大森3丁目であった。住居表示に関する法律（法律119号）が施行されて、内川を境に、上流に向かって川の右側を大田区大森西2丁目とし、川の左側を大田区大森西3丁目とされた。

この際、番地を指定するにあたって、街区符号という分類方法がとられた。これは、その地の地番を決める際に、その町にある駅（国鉄大森駅）や役場（大田区役所）のような市町村の中心に近い街区から1丁目、2丁目、1番2番と、振り分け指定されていく方法がとられた。

国道や、都道、河川なども地域を分ける指標とされた。また、地域名に中央や、東、西、南、北、さらに本町などが地域名に加えて冠された。当時は、大田区役所が池上通りにあったことから、区役所を大田区の中心として据えて、ここを大田区中央1丁目とした。

### 大森西1丁目

大田区大森西の街区呼称は、大森西1丁目が大田区役所から近い国鉄東海道線より東側の部分が指定された。

環状七号線の春日橋陸橋下から、東へ沢田交差点まで行き、ここから南に内川富士見橋際まで、富士見橋からは、川沿いを西へJR跨線橋まで。ここから線路に沿って、春日橋陸橋の下まで。これが、新しい大田区大森西1丁目の区域とされた。

新大森西1丁目は、旧番地の大森2丁目、新井宿5丁目、新井宿7丁目の一部を編入して、元の町名の大森に、役人の好きな東西南北の中の「西」を冠され大森西とされた。

### 大森西2丁目

大森西2丁目の範囲は、環七沢田交差から、環七沿いに、京急高架を超えた第一京浜国道の大森東交差点まで。この途中には、大森浅間神社、鰻のはせ川、酒類の大卸、八田商店がある。ここから、第一京浜国道を内川大森橋まで行き、内川をさかのぼり、東邦医大通り（鬼足袋通り）富士見橋から環七沢田交差点までの4点を囲った部分。もとの大森1丁目、2丁目と3丁目の一部が含まれる。

### 大森西3丁目

大森西3丁目は、大森西2丁目に内川の右岸を譲り、さらに、大森西4丁目には、富士見橋左岸の東邦医大通りから先の国鉄線路までの部分を譲っているので、もとの大森3丁目よりだいぶん地域面積が減少した。

### 大森西の町名変更

当地の区画整理は、1964年9月1日施工で、現在の大森西1丁目は、元の大森2丁目と、新井宿5丁目、新井宿7丁目のそれぞれ一部から供出された。大森西2丁目は、元の大森1丁目、大森

2丁目、大森3丁目の一部から供出された。大森西3丁目は、元の大森3丁目が大きく削られて、新たな大森西3丁目とされた。

大森西4丁目は、元の大森3、大森4、大森5丁目と新井宿7丁目のそれぞれの一部分が同番地とされた。大森西5丁目は、元の大森4丁目の一部が同番地とされた。大森西6丁目は、元の大森5丁目の一部があてられた。大森西7丁目は、元の大森5丁目と本蒲田のそれぞれ一部が同丁目に編入された。

### 大森神社（寄木神社）

法律119号により、「大森北」の住所表示では、国鉄大森駅を基準地としているので、大森駅東口の繁華街付近を1丁目と表示。京急平和島駅の住所は、大森北の中で大森駅より一番遠い丁目の大森北6丁目とされた。

これにより、平和島駅横の第一京浜国道沿いに建立されている大森神社は、大田区大森1丁目住所から、大田区大森北6丁目の住所となった。

大森神社は、1932年10月の東京市編入の前までは、「寄来（寄木）神社」と呼ばれていた。御祭神は、久久能智命（くくのちのみこと）で、樹木の神様。言い伝えでは、当地は樹木が多く、まるで鬱蒼とした大きな森のようであった、と形容とされていた。

大森神社前の第一京浜国道の下り車線側に「北山」という作業用品の会社ビルが見える。その横の細い道が美原通り（旧東海道）から、大森神社へと続く参道であったという。

旧大森1丁目は、この大森神社より南東側は美原通りを含んだ内川橋までの範囲。北方向は、マラソンの折り返し地点とされていた平和島入り口までと、広範囲だった。

この地域には、移転した中央卸売市場大森出張所、政財界の御用達で栄えた、大森都新地。内川までの美原通り商店街、日本特殊鋼会社、名刹、浄土真宗本願寺派、徳浄寺などが含まれる。

これら、元大森1丁目地域の大森神社は、大森北6丁目とされた。元の中央卸売市場大森出張所を含んだ、環七より北側の美原通りは、第一京浜国道の拡張工事が終了したのち、大森本町1丁目の住居表示とされた。

環七より南側にある美原通り地域の徳浄寺や日本特殊鋼跡地は、環状七号線の延伸工事の完了と、第一京浜国道の拡張工事が終了して、大森東1丁目と住所変更された。

脱線ついでに、大田区山王地区の住居表示について述べておこう。役所、駅などの拠点から町名表示をすると、大森駅山王口にある天祖神社辺りが1丁目表示となってもよさそうだが違うのだ。当時は、この辺りは入新井と呼ばれていた。

元々山王と呼ばれていた地区は小さく、大田区山王1丁目が表示されているのは、現JR大森駅山王北口出口から環七に向かう、ジャーマン通りの坂を下った右側部分である。

ジャーマン通りの一つ目信号角に山王小学校があり、このあたりが山王二丁目。ここから坂を下って行ったあたりの右側部分の一角が山王一丁目となる。

坂下まで行き、信号を右に、また右にと、少し道なりに歩いてゆくと、尾崎史郎記念館や山王草堂記念館（徳富蘇峰の住居跡）がある。そこを過ぎると、すぐに住居表示は品川区に変わる。

内川、大森橋（第一京浜国道に架かる橋）

寄り道が過ぎたので、再び内川上流へと向かう。その前に、第一京浜国道の道路を隔てた川の下流を見てほしい。正面に、ペット霊園のビルが見えると思うが、そこから右の部分になる。第一京浜国道の川崎方向寄りの美原通りに挟まれた3角地帯が元の大田区大森3丁目の住居表示であったところ。

ここも、法律119号により、今の大田区大森東2丁目に変更された。自分が小学生の時分だから、半世紀以上も前の事になるが、ここから大きな赤いランドセルを背負った女の子が、第一京浜国道を超えて、大森第二小学校まで通学してきていた。今考えると当時は、この地域も大森第二小学校の校区だったのだ。

一之橋と京急内川橋梁

大森橋から次の一之橋までは、ほんの7、80メートルの距離。その先、京急内川橋に至っては、一之橋からたった数メートルしか離れていない。

内川にかかる京急の線路により、川沿いの道は左右とも、ここで遮断されていた。しかし、京急が高架化されたことにより、その下を通行できる川沿いの道が左右とも、新たに作られた。これによって、内川沿いの道は、左右ともに第一京浜国道から、JR鉄道の橋までストレスなく通行が出来ることとなった。

これにより、川沿いをウォーキングコースとしている人や、近在学校の運動部の中高生ランナーにとっても、格好のランニングコースとなった。ランナーは、富士見橋から第一京浜国道の大森橋まで、車の危険をそれほど意識することなく、内川を周回コースとして運動をすることができるようになった。

学校裏駅を特定する

さて、内川右岸の京急高架下を右に曲がってほしい。初めの4つ角の左側の正面に見えるのが、大森諏訪神社だ。この参道から見る彼岸の頃の朝焼け、夕焼けが何とも美しい。

高架沿いをそのまま直進してほしい。高架下は、京急が最近作った月極の駐車場になっている。さらに、民間の駐車場と続くのだが、出入りの車両に注意してかまわず中へ入って、フェンス越しを観察する。

高架下部分も駐車場になっているのだが、ここが、京急の「学校裏駅」であった可能性が高い場所であると確信する。

古駅の場所の特定のため、京急の広報に聞いてみたのだが、記録が存在しないとされた。代わりに、同、京急広報で、「京浜急行電鉄、今昔」という書物があると紹介してもらい購入したのだが、「学校裏駅」が何処にあったとされる記述はなかった。

このため、インターネット上で大森のことを書いている人たちから、有力な情報と思えることからピックアップ。加えて、自身の幼少の記憶も参考に、「学校裏駅」の場所の特定を行った。

自身も半世紀以上、当地で生活をしているので、（1）学校裏駅は、沢田通り（環七）の外側にあった（2）学校裏駅は、京浜急行・山谷駅（大森町駅）より品川駅方向に向かい300メートル

ほどのところにあった、の2つの情報は比較的に信ぴょう性が高いとおもわれる。結果、この場所を京浜急行電鉄「学校裏駅」の跡地と、判定した。

## 二之橋

内川に戻り、上流へ進む。次にあるのが二之橋である。右側には出身校の大森第二小学校（現、開櫻小学校）がある。同級生には、CBSソニーレコードから「時には、母のない子のように」で、一世を風靡したカルメンマキちゃんがいた。今でも、ライブハウスで歌っているというから、息の長い人だ。

大森第二小学校の斜め右側に位置するところに、大森第六小学校（現、コラボ大森）があった。我々は、戦後のベビーブーマー世代の最後のほうにあたる世代である。このため、同世代の人口増のあおりを受けて小学校低学年時は、2部制授業という教育スタイルを強いられた。

これは、団塊世代中心部の生徒数が多く、授業を受ける教室が足りなかった。生徒は、午前の部と午後の部に分けられて授業を受けた。この2部制授業の解消のため、大森第六小学校が設立され、生徒を分散し、2部制授業は解消された。

今では、少子化となり、2部制解消のため設立された大森第六小学校は廃校、区施設のコラボ大森と名前を変えた。また、大森第二小学校は、この第六小学校と統合して、校名を開櫻小学校に変更した。

## 耕地整理と大田区の工業化

このあたり一帯は、耕地整理組合による区画整理事業が早くから行われたことと、内川の浚渫、掘削事業が進んだことにより、平坦なマス目の地形になっている。

特に、ここからの上流域には、東邦医大通りを中心に、名の通った工場がいくつもあった。耕地整理事業と内川の新規掘削造成が、その後の工場誘致を促した。

これに伴って、工場に部品などを供給する小規模工場群が形成された。追いかけるように、工場関連業者や、工場従事者の住宅なども建設されていった。追っかけ、食料品店、酒屋、食堂、飲み屋、質屋、床屋、パーマ屋などの店舗も出来ていった。住勤至近で、便利な一地域完結の小さな産業経済圏、生活圏が形成されていった。

大田区の工業化は、港区、品川区の工業化に追従する形で起こった。それまでの大田区の特産品と言ったら、麦わら帽子の生産程度しかなく、どちらかといえば、漁業や農業が人々の暮らしを支えていた。

これが、東京湾の港湾整備により、大型貨物船舶の停泊が可能になったこと。石炭、コークスの火力発電による電力の安定供給ができていったこと。第一京浜国道など主要道路の拡幅工事が進んだことなど、産業基盤の伸張が工業化に拍車をかけた。

農地の有効利用を目的に明治44年4月1日に施工された耕地整理法は、各地で組織された耕地整理組合（地権者など）により、地主同士が離れた土地の交換や、傾斜する土地の平たん化事業、道路整備事業を行った。

この結果、使いやすい土地は、工場の進出を促した。港、品川に起きた工業化の波が隣接する

大田区にもそれほど時間を置かずに伝わった。

品川地区などにあった既存工場から近いことなども、受注の獲得に奏功した。これらにより、受注した製品の納期が短くできたからだ。

加えて、出来上がった製品が優秀であったことなども重なり、取引先に信用された。町内、近隣の町工場がそれぞれの得意部門の仕事を受け持った。大田区内に仕事を依頼すれば、張り巡らされたネットワークによって一つの製品が出来上がる、と信頼された。

## 昭和の偉大な宗教者

開桜小学校近くに、昭和の偉大な宗教者といえる高橋信次氏が、晩年の数年間、住んでおられた。長野県佐久市出身の氏は、釈迦仏教の理念を基本とした八正道を中心に、人々の心の平安を説いた。氏は、G L A（神理の会）という宗教組織を立ち上げたが、病気のため、早逝された。氏は、また、電子部品製造の会社を経営されていて、会社自体も、大森諏訪神社の近くに構えられていた。

## 諏訪橋

二之橋の次が、諏訪橋となる。三之橋という名称は存在しない。この諏訪橋と四之橋の中間の右岸に、金山神社があり、その奥側に大森諏訪神社がある。

## 金山神社

金山神社は、とても小さな社で、注意をしなければ通り過ぎるほどの境内。社務所もなく、現在では、大森諏訪神社が同社を境外末社として管理をしている。

本社部分一帯が30センチほど土盛りを行ったような構造になっていて、古墳跡とされている。過去に、教育委員会が発掘調査をおこなったのだが、戦国時代前後の武士の武具などが出土したとされている。

諏訪神社の神職によると、最近、金山神社古墳について、地元の古老から新たな情報の提供があり、境内の別場所を平成30年春に発掘調査することになっている、とのこと。

## 大森諏訪神社、境内に海苔供養の終業記念碑

大森諏訪神社の創建は、五百数十年前とされ、御祭神は、大国主命の第二子の建御名方命。風水害や流行病を防ぎ、農耕、漁業の神として祀られている。

江戸時代に信州諏訪の商人が冬季の出稼ぎに当地を訪れた。海苔を仕入れて、帰り道に海苔の行商を行っていた。そのうち、当地に住み着き海苔を販売する者や、海苔の生産に従事する者が増えていった。彼らが中心となって大森諏訪神社を請願、建立したのではないかともいわれている。

当地には、田中、平林、須山などの苗字の方が多い。信州諏訪地区に田中姓や、平林姓が現在でも多いことなどを考えると、当時の出稼ぎ者がそのまま当地に住み着いたことも考えられない事ではない。

大森諏訪神社の氏子の範囲は広く、内川の下流の部分がかかなり含まれている。このため、五月の祭りの神輿の挙行は、第一京浜国道を超えなくてはならないので、川下の大森東一丁目、二丁目町会の氏子は毎年、広すぎる第一京浜国道の横断に際し交通整理で一苦労するのだとか。

旧内川は浅く曲がりくねっていたが、これを河口から直線的に、しかもそれなりの深さに浚渫施工された。このことにより、内川に海苔船の船着き場が多数でき、海苔の生産性がぐんと上がった。

その後、京浜工業地帯の工業の発展による水質悪化などによる漁業権の放棄まで、海苔船は内川の風物詩であった。内川に係留する漁業者たちにより大森諏訪神社の境内には、大森の漁業の終焉を記した石碑が建てられている。

ほかにも、産業道路際にある大森第一小学校裏の、大森児童館敷地内（大田区大森東3-5-15）にも海苔養殖の終業記念碑は確認でき、大森の海苔生産が盛んであったことが確認できる。

大森東3丁目にある大森児童館まで来ることがあったなら、産業道路をさらに2、300メートルほど南進しよう。信号にして2つ目である。

「弁天神社」というバス停留所のある小さな交差点。その道路際に三輪蔵島神社があり、ここにも、かつて古塚があって戦国時代の人骨や武具などが出土している。

「源義経伝説」があり、東征の際に多摩川超えで、時化に遭遇した。今では想像もできないが、大きな森が見えたので、風除けのために上陸し、そこで時化をやり過ごした。

時化も去り、義経一行が出発しようとしたときに、船をつないでいたもやいに、海苔が付着しているのを発見した。義経は世話になった村人に、海苔の養殖方を伝授した。ここから、大森の海苔生産が始まり、義経は海苔の神様とされた。

#### 四之橋、工場主たちが作った教育機関

ここは、橋を渡った川沿いの学校に注目したい。現在の名称は、大森学園高等学校という。古くは、1938年（昭和13年）に大森機械工業徒弟学校として、この地に上京してきた集団就職者らのために作られた学校。

高等学問の取得や、工作機械の操作の技術向上を目的に、この地区の工場経営者の有志らにより設立された。

全寮制で入学するのが中心で、生徒の学費などは雇用契約を結んだ工場主が負担した。主に、東北地方からの集団就職者の高等教育と、工場後継者の育成を目標に発足した。

高等小学校卒業者を入学資格として、1942年（昭和17年）財団法人大森工業学校、1951年に学校法人大森学園に改名、改称した。

その後、産業構造の変化から、2005年に普通科を設け、2007年には男女共学制として、今日に至る。現在では、IT関連の教育にも力を入れている。普通科で4コース、工業科で3コースの科目を作り、生徒を募集している。

川沿いの大森学園高等学校のフェンスの先にあるのが、都営大森西3丁目第2アパート1号棟。工場跡地に建設されたものだが、元は報国チエーンという会社で産業用機械の伝動、駆動用製品を

製造していた会社があった。

#### 六郷用水（四之橋―澤田橋の石柱）

四之橋の右詰めに戻り、南北に延びる歩道に注目してほしい。歩道の欄干に石柱が建っていて、「四之橋」と書かれている。この下は何やら、水路になっていることがわかる。

これが、六郷用水と呼ばれた用水路跡の一つである。用水路跡は、その歩道を北に向かって貫かれている。歩いていくと、右側に、諏訪神社の裏門。さらに、旧大森第六小学校と続き、環状七号線に至る。

環七に至る手前の右側に沢田東児童公園があり、中に大森沢田地区の四町会が建てた「大森沢田村について」という石碑が建っている。その石碑によると、すでに1697年の古文書「大森村検地帳」には、澤田村の名が残っている、としている。

環状七号線の際の水路跡にも、「澤田橋」と書かれた六郷用水の石柱が見て取れる。さらに、環七を跨いだ向こう側にも澤田橋の石柱があり、古の用水路跡を偲ぶことができる。

内川は、海水が遡上するために、その水を飲料や、農作業に使用できなかった。このため、内川流域では六郷用水を生活用水並びに田畑の灌漑用水として使用した。

網の目のように張り巡らされた六郷用水の一路は、先ほどの内川、四之橋で上水としての役目を終え、下水となり東京湾に流れ込んだ。

#### 小泉次太夫

六郷用水の灌漑事業は、天正8年（1590年）、食糧増産を目指した徳川家康の江戸の新田開発に端を発した。小泉次太夫の多摩川から農業用の用水を引く灌漑工事の提案を、家康が了承した。

小泉次太夫は、用水奉行に任命され、慶長16年（1611年）に東京南部の六郷用水（次太夫堀とも言う）と川崎東部、北東部にまたがる二ヶ領用水を完成させた。

#### 大森浅間神社

澤田橋の石柱のある環状七号線を沢田交差点方向に向かうと、すぐに大森浅間神社がある。大森浅間神社は、江戸時代に庶民の間で山岳信仰が流行した。このため、富士登山に際して道中の平安無事を祈願するために、東海道の要所大森に、建立された。

富士山信仰の熱い地元信者らが富士山本宮浅間神社に対して大森浅間神社の勧請を請願し建立した神社。1716年から1736年の享保年間に建立されたという。主祭神は、木花咲耶姫命。

大森浅間神社（昭和15年当地に遷社）は、耕地整理と第一京浜国道と沢田通り（環七通り）の拡張工事で、2度の遷社を行っている。

初期にあった場所は不明で、由緒やそのほかの書き物から想像すると、旧内川の上流部ではなかったかと考えている。

二度目の遷社は、大正七年4月。こちらは、古地図に掲載されていた。現在の環状七号線沿い

にあった。現在の大森浅間神社から、平和島駅方向に戻り、二つ目の信号のところの左側一帯。鰻のはせ川、浅間食糧、イズミック（八田商店）の酒類倉庫前の信号を渡った右側一体だ。その先に見える横断歩道橋までの範囲でかなりの広さとなる。

道沿いにあるフィットネスクラブやタクシー会社となっているあたりは、過去は、東京ガス大森工場のコークス置き場として使用されていたことを自分も知っている。かなりの広さがあったので、ここらあたりが、元の大森浅間神社の神域だったことは容易に想像できる。

この地の現在は、大森北6丁目の住居表示となっているが、区画整理がされる前は大森二丁目であった。大森浅間神社の例大祭では、この地区も、神輿や山車の練り歩きの範囲となっている。

旧、大森浅間神社の敷地の範囲について記しておく。京浜急行の平和島駅寄りの環七の横断歩道橋から始める。歩道橋下は、鶏肉をコンロで焼いて食べさせる東京焼き肉という店がある。そこから、環七を沢田交差点に向かい次の信号まで進む。途中、タクシー会社やフィットネスクラブを越える。

信号角にある病院が複数入居したビルを右に折れる。次の四つ角の大森第二中学校があるところまで行き、この小さな四つ角を右に曲がる。

途中、アロハ薬局と書かれた調剤薬局のすぐ先に目をやれば、右側に六郷用水跡があるので、そこの細道を歩いていくのもよい。道なりに進めば、京急の高架を超え、第一京浜国道までの用水路跡を辿ることができる。

大森第二中学校を右に曲がると、さびれているが、そこが京浜急行平和島駅へと続く商店街である。やがて、小さな四つ角があり、左にコンビニ、ローソンがあり、右が、中華料理の「日進亭」という店舗がある。

日進亭の創業は、70年を超える。中国からやってきた初代ご夫婦が始めたお店。今は、メニューに載っていないが揚げ餃子が絶品だった。品数は多くはないのだが、何を選んでも外れなしといったところ。

横浜発祥とされているサンマー麺がメニューにあるのだが、京急沿線では品川に向かって、サンマーメンを提供する北限の店となるのではないか。

ここを右に曲がると、環七の横断歩道橋のところに戻ってくる。この範囲のすべてが浅間神社の神域であったとすると、かなりの広さだ。また、浅間神社の境内に六郷用水が流れていたことを思うとロマンを感じる。

後日、大森浅間神社が最初に建立されていた場所が無性に知りたくなり、同神社を突撃訪問した。

結果、若い宮司さんによると「正確な場所はわかりませんが、環七馬込陸橋上の旧道の（田無街道）。今のバス通りの標高の一番高い部分にあった」と、自分は聞いているとした。

地形の高低差から考えると、環七、新馬込橋のあたりが峠の頂上にあたるので、この辺りなのか。旧内川は、この峠の左右を流れていた。田無街道の街道筋で、ここなら、浅間神社の由緒にある富士山は良く見えたはずだ。だが、東海道の美原通りや、澤田村の地からは遠い。

一方、そこから環七通りを長原方向に少し下った、リコー事業所横にも同名の馬込浅間神社（

大田区中馬込2-1-21)があつて、不思議な感じがする。馬込浅間神社のHPを見ると、大森浅間神社のHPにリンクしている。由緒によると主祭神は、大森浅間神社と同様の此花咲耶姫命となつており享保17年(1732年)に勧請されたとしている。

## 五之橋

橋から大森第八中学校を見て、北に向かつていくと、環七沢田交差点の5差路にぶつかる。昭和21年に補助27号線と環状七号線の建設が決定されるまでは、この道で、大森駅方面まで歩いて行けた。また、五之橋を南に進んでいけば、梅屋敷公園まで直進できた。東邦医大通りができるまでは、この道も主要道路の一つであつた。

さて、川沿いの話に戻ろう。大森第八中学校は、団塊の世代の教育を支えた中学校だ。最盛期は1学年16クラスを数えた。

元は、「鬼足袋工業」という足袋を製造する工場があつた。静岡、磐田市出身の寺田淳平という方が、コーデュロイの生地を生産を国産化した。大正9年にコーデュロイの生地を使用した「鬼足袋」を発売した。足袋は、1882年、大阪堺で、辻本福松氏創業の「福助印堺足袋」(福助)と、関東の鬼足袋と人気を二分し、ともに好評を博した。

この名残で、地元の人々は、いまでも補助27号線(現在は東邦医大通り)を鬼足袋通り、と呼んでいる。

内川左岸の川沿いには、前出の報国チエーン社、その右隣に、クジラ、サバ缶詰などで有名な林兼水産会社(マルハ太洋漁業)があつた。同社は、プロ野球球団、太洋ホエールズ(現、横浜DeNAベイスターズ)を有し、神奈川県川崎市の川崎球場を本拠地とした。1950年代のあこがれは、同球団のエース、秋山登だつた。

その隣には、東邦医大通りに接する広さで、レンタルリネンの先駆けのデイベンロイリネンサプライ社があつた。式場や、レストランで使用する、テーブルクロスや、キッチンウェアなどをレンタルで貸し出す仕組みをアメリカから導入し、成功させた。

## 富士見橋

名前の通り、橋上から富士山が見えたかは定かではないが、自分の子供のころは、木造の二階家からは確か、遠くに見えた。富士山は、気象や気圧の関係で見える大きさが全く違うのが不思議だ。

富士見橋の架かる鬼足袋通りは、補助27号線として、品川区南大井の水神社下から大田区蒲田まで、JR東海道線の東側に新たに設けられた都市計画道路。計画地域にかかる住民を、立ち退かせて建設した道路である。

片側一車線の道幅9メートルの道路に、国鉄大森一蒲田駅間のバスを運行させた。これに、沿道の商店に荷下ろしを行う商用車が路上駐車して、道路はいつでも渋滞していた。

現在、再度の幅員拡張工事もほとんど済んでいて、大森西の沢田交差点から、蒲田の呑川アヤメ橋区間は道路幅が20メートルに拡張された。

9メートル道路の名残を探すとすると、富士見橋が古いまま残っている。それでも、橋の架け替

え工事が少しずつ進んで仮設の歩行者用の橋脚はすでに完成している。

鬼足袋通りを少しだけ歩く

富士見橋の架かる鬼足袋通り（東邦医大通り）を、ほんの少しだけ蒲田方向に歩いてみる。左側の工場跡地を工事中のところ、デイベンロイリネンサプライというレンタルのリネン商品を商う会社があったところ。

1950年創業、デビット山田、ロイ広繁、リチャード・イーの3氏がデイベンロイ社の日本支社として設立。テーブルクロスやコック服などのレンタルで成功した。

工場跡地は、23000平方メートル。三菱不動産がショッピングセンターとして開発している。2018年12月の開業を目指している、とされている。

東邦医大通り右側の歴史を感じる建物が、天理教大教会大森町という神社仏閣風の建築物。築90年くらいは経ていると、建物内で掃除をしている若い修行者の方から聞いた。

天理教は、中山みきという方が天保9年（1838年）に起こした新宗教。本拠地は、奈良県天理市。その隣の現在マンションとなっているところは、日本電報公社の大森電報局があった。

その先、信号2つ目となるが、信号機に大森西4丁目と表示がされている。ここを右に曲がってほしい。道路の右側を歩いて行くと、歩道上に植込みが続いている。

この植え込みが、元の内川の川筋の一つだ。右角に公園があるが、直進する。都営住宅の間の道は、住民以外でも、歩行はOKだ。

なので、植え込みに沿ってかまわずにJRの線路に至るまで、かつての内川の流れをたどることができる。線路に突き当たると、流れはここで消滅していて、その先は不明だ。

一方、内川の下流の痕跡をたどるには、東邦医大通りに戻って、大森西4丁目の信号から、さらにもうワンブロック蒲田寄りに歩く。距離にして100メートルほど。

信号のない小さな四つ角だが、ここを左折する。角は、床屋さんだ。すぐ左手に大森西図書館があって、先の角が公園になっている。直進すると、右側に、谷戸三輪神社（西大森村の鎮守。主祭神、大國主命）がある。この東西に延びる道路が、旧内川の川筋であった気がしてならない。

このあたりの旧地名の谷戸は、地面が低かったことを表している。ここから道は、左に緩やかにカーブをしている。まるで、川の流れが造ったと勝手に想像する。

このまま、京急大森町駅近くの高架下まで道は続いている。今は、高架によって道が遮断されているが、その昔は、高架の先の第一京浜国道まで道は続いていた。

回り込んで、反対側からその道を眺めれば分かり易い。そのため、京急大森町駅前の高架をくぐって、第一京浜国道を右に曲がる。正面に城南信用金庫大森支店が見える。

道沿いのパチンコ屋さんの先のマンションを右に折れる道があるので、見てほしい。もとの道が繋がった。

ここで、内川は、大きく流れを変える。第一京浜国道の品川方向へと流れて、現在の内川橋の第一京浜国道のあたりで合流したと推測する。これより下流は、護岸工事はされたが大きな改良はされていない。なので、ここからの内川は、若干であるが蛇行しており、自然河川の、らしさ

を感じる。

## 境橋

境橋の道も、北に進めば環状七号線を越えて、ＪＲの大森駅まで続く道だ。この地区は、元大森2丁目であったので、大森浅間神社の例大祭では、神輿や山車が練り歩く地域だ。

現大森西1丁目地区は、それでもまだ町工場が残っている地域である。反対に、内川の南の現大森西4丁目地域は、工場の撤退が早く、ほとんどが、大型マンションや公団などに姿を変えた。

## 三ツ木橋、新田橋、ＪＲ東海道架道

三ツ木橋から新田橋、ＪＲの高架橋までの右岸部分は比較的、町工場が残っているエリアだ。国鉄の線路に沿って、元は大きな石材工場があった所。石材工場跡地を区分して、それぞれの工場が今は使用している。この地域の町工場の数は、いまでも40～50社ほどは数えることができる。

三ツ木橋のたもとにある、国際クリーニング大森工場の脇を、環七春日橋の方向へと歩いていく。左角は、マンションが新築された。

少し左に折れ曲がっていくのだが、かまわず次の四つ角まで歩いてみる。左側が、すべて石材工場の跡地だ。大きな石材工場だったことが伺える。変則的な四つ角までくると、左側に背の低いＪＲの架道橋を見ることができる。

## 作尻架道橋

作尻架道橋は、国鉄の東海道線開業に伴って架橋したものだ。橋下、僅か170センチメートルほどの架道橋である。元は内川がこの地を東西に流れていたため、川をまたいで跨線橋を作り、鉄道車両を通過させた。

やがて、耕地整理事業が始まり架道橋の両側に歩道が設けられ、人が架道橋を通り抜けられる構造になった。

作尻架道橋という名称のいわれは、辺りの地名が大きく関係している。西側、ガード先の地名は、現在では大田区中央となっているが、その昔は「河原作」といわれる小字であった。

一方、現在のＪＲ大森駅の付近を昔は、新井宿村と呼んでいた。小名では「沢尻」と呼ばれていた。更に、ガード手前の大森西1丁目、西2丁目の地名は「沢田」と呼ばれていた。結果、大森村の沢田地区の南西境界のところに位置する跨線橋なので、それらの名が合作されて「作尻」となったのではないかとする人もいる。

## 三ツ木橋、新田橋の謂れ

作尻架道橋から、内川の三ツ木橋に戻ってみると途中、緩やかな右カーブが描かれており、元内川の流れが想像できるのではないだろうか。この、南北に蛇行した元の内川を東西に掘削開墾し、直線の流れに直したのが、大田区山王にある三ツ木建設工業会社だ。

当時の大森耕地整理組合の平林浅次郎組合長より、大正14年10月に「三ツ木建設工業は大正5年

の内川開墾に従事し、河川工事に功績があった。その功労を称える」とする書状もらい、あわせて、この橋（現、三ツ木橋）を「美津木橋」と命名するよう促された。

また、新田橋の命名は、橋の所在周辺が古くは新井宿村に属し、新田地区と呼ばれていた地区だから。その先の内川上流部分（暗渠部分）の地区は、同じく新井宿村の河原作地区と呼ばれていた。

### 桜並木から昼食休憩

新田橋からJR高架までは、10メートルほどの距離しかない。JR高架下には、設置時期は不明だが、個人の方が造ったとされるアングル製の幅1メートルほどの鉄板床の橋が川の右側に東西に向けて架かっている。人や自転車が、譲りあいながら通行している。

昔の国鉄の車両は、ポットン式のトイレが敷設されていたので、列車が通過するときそこに通過と、時として汚物まみれになるので、注意が必要だった。

さて、無事に大田区中央側に渡れたら、あとは迷わない。桜並木に沿ってひたすら歩けばいいだけだ。この桜並木は、暗渠にされた内川の流れを近隣住民が記念に植樹したもの。春には立派な桜を楽しむことができるのだが、そろそろ、倒木の危険なども考えてソメイヨシノとしての勤めを終了させてあげたいほどの巨木も増えた。

桜並木が終了したところが、掘削された内川の終了地点だ。道は、五差路になっているので、直進するか、斜め右側に進むかだ。どちらにしても、池上通りに突き当たる。

東急バス車庫（バス停留所あり）の斜め右側に越後屋という日本蕎麦の店がある。4人掛けの席が5～6テーブルのこじんまりした店だ。東急バス社員の胃袋を賄う御用達の店であり、いつも賑わっている。

自分は、1合瓶の焼酎にそば湯をもらう。1合、400円で飲めるので、つまみを何にするか、迷いながら内川散歩の疲れをいやすのに重宝させてもらっている。

平成30年3

月「了」